

MRテキスト2018

疾病と治療

基礎

追補

(2018年6月)

B II型アレルギー

自身の細胞に抗原性が認識され、IgGやIgM抗体が結合することで起こるアレルギーである。自己細胞が攻撃されることから細胞傷害型アレルギーとも呼ばれる。主な疾患として、重症筋無力症（「疾病と治療-臨床」p.114参照）、特発性血小板減少性紫斑病（「疾病と治療-臨床」p.156参照）などがあげられる。なお、重症筋無力症はV型アレルギーに分類されることもあるが、基本的な機序はII型アレルギーと同じである。

何らかの原因（炎症、薬剤など）で自己細胞の表面に抗原性が出現し、異物と認識されると抗体（IgGやIgM）が結合する。その抗体に血液中の補体が作用し、膜傷害複合体が形成されることで細胞膜が破壊される。同時に、細胞に結合した抗体を目標に、マクロファージや好中球の貪食・処理や、キラーT細胞による攻撃が起こり、細胞が傷害される。II型アレルギーは抗体の存在により細胞傷害が起こるため、さらに抗体依存性細胞傷害ともいう（[図9-19b](#)）。